

運動家としての心

東京都・元ゼンセン同盟副書記長兼組織行動部門長
佐藤文男

— これは 2010 年 1 月 12 日、UI ゼンセン同盟組織強化・教育局主催の
「佐藤先輩と語る会」における佐藤文男さんの講演録です。 —

15 歳で東洋紡に入社

佐藤です。現在 85 歳です。私は高等小学校を卒業して、昭和 15 年、15 歳のときに山形県南陽市から東洋紡の富田工場（三重・四日市）に入社しました。

東洋紡では、高等小学校を卒業した人たちを、入社後 3 年間、実務学校で教育しました。私は電気係に配属されました。

UI ゼンセン同盟の現在の書記長の島田さんは、東洋紡のキャリア・ナショナル社員です。私は、流通で言えばエリア社員です。

その当時、東洋紡、鐘紡、日紡（大日本紡績）、日東紡、日清紡、富士紡、大和紡、敷紡、倉紡、呉羽紡は十大紡と言われ、日本を代表する大企業であり、日本の基幹産業でした。

今は「繊維関連部会」と言いますが、当時、綿紡は大変な力を持っていました。もともと、全繊同盟も当初は関東と関西にそれぞれあったものが、統合して昭和 21 年 7 月、全繊同盟結成と同時に一つになったのです。

ただ、率直に言って、私は今日の UI ゼンセン同盟の基本的な運動の考え方、労使関係のあり方を築いたのは、十大紡であると思っています。

山形県は、戦前、戦中は非常に貧乏でした。それを分かりやすい物差しで言おうと思います。私の妻は、静岡県の浜松生まれです。山形、岩手、秋田、青森は貧乏県です。その一番の原因は何か。私どもの小学校は、50 名学級でした。そのうち、旧制中学、工業学校や商業学校へ行ったのは、わずか 10 分の 1 ほどでした。私の学級で進学したのは、51 人の生徒のうち 4 人です。男子の 6 割は高等小学校へ行きましたが、それ以外は 6 年で卒業です。農家の子供のほとんどが小学校まででした。

しかし、静岡県浜松生まれの妻は私と 3 歳違いですが、静岡の女子は 4 割までは女学校や旧制中学へ行きました。当時の山形県と静岡県を一つの物差しで比較すると、これだけの差になります。

山形や秋田は、一部の地主が膨大な土地を持っていて、ほとんどの農民は小作人でした。例えば 1 反（300 平方メートル）で米 10 倍採れるとすると、4 倍は自分たち小作人のものになりますが、6 倍は地主に納めることになります。ですから、多くの農家は貧乏だったのでした。

私のこれからのお話で考えてもらいたいのは、紡績と、海軍工廠とか、言わば政府直轄の工場など、産業によってそれぞれ大きな違いがあるということです。

ただ当時、東洋紡や鐘紡などの大手企業には、現在の労働基準法のような工場法というものがあったわけですが、戦後 GHQ から当時の実態は「女工哀史」と言われました。しかし、会社は、小学校 6 年を卒業した 13 歳の子供たちを管理するために、また、ある程度、親に対

する面子もあったと思いますが、「一人歩きはだめだ」と言われたものでした。外出する場合は、部屋長が一緒に付いていきます。筒袖とか三尺帯というのは黄色や赤いものです。それを締めて5、6人で四日市の町を歩くと、バカにされたものです。「紡績女工が人間ならば、チョウチョ、トンボも鳥のうち」というように揶揄されたこともあります。

冷静に考えると、「女工哀史」的な面もあったと思います。しかし、少なくとも、十大紡などは、そうではなかったと思います。特に、グンゼは「女学校の次がグンゼだ」と言われるぐらいに社会的に評価されていました。

私は、東洋紡の寮に入りました。その寮は、男子が約400名いました。そして、当時の憲法で、男子は満20歳になると徴兵の検査を受ける義務がありました。戦争が激しくなってくると、それこそ身体障害者以外はみんな軍隊に行かされた時代でした。私も15歳の年に入社して、19歳の年に軍隊に召集されました。

その年、寮の中では、私達の年齢のものが年長者になっていて、みんなからも信望があつたからかもしれません、私は400名の寮長になりました。私どもの唯一の娯楽は映画鑑賞で、よく寮の仲間と富田劇場に映画を観に行きました。今でも忘れられないのが、先代の水谷八重子さんの主演の『小太刀を使う女』という映画を観ている最中のことです。寮の仲間から、「召集令状が来た」ことを伝えられ、今でもその時のことを鮮やかに覚えています。

19歳で軍隊に入隊

昭和19年、その当時は日本の敗戦が色濃くなつて、とにかく若い男性は戦場に行かなければならなくなりました。私の同期は19歳と20歳で、私は19歳で軍隊に入りました。そして、私は技術兵として召集されました。千葉県市川市国府台に野砲の兵舎やその軍隊があり、東北方面から召集された人たちが集まつていきました。電気関係の技術者で名古屋の人もいましたが、ほとんどが東北の兵隊でした。そこは集結地なので、倉庫で宿泊し、軍隊の制服等が支給されました。

「佐藤文男」と呼ばれ、そこに行って私に渡されたのは冬物の軍服でした。集まつた人の中には夏服を渡された者もいました。自分たちがどこへ行くのかは告げられず、分かりません。ただ、冬服と夏服に分かれました。

後で聞くと、夏服を渡された人たちは南方に行かされたということです。南方は、すでに制空権も制海権もほとんどアメリカに握られていました。ですから、台湾沖を経たところで敵の潜水艦に魚雷を撃ち込まれ、全員死亡してしまいました。南方組150名は、入隊して約2週間で一人残らず死にました。まず、私はここで2分の1の確率で生き延びたわけです。

その後、玄界灘を越えて釜山の競馬場に集められました。私たちは、これから中国へ行くのか、満州へ行くのかも分かりません。上の将校の人たちだけが知っています。そこで待つてているときのことです。どういうことが起きたか…。朝鮮の人たちが近寄ってきて、「兵隊さん、時計」と言っています。私たちは時計を持っていましたから、その時計と、餅とかたばこなどと交換してほしいと言ってくるんです。

ここで言いたいのは、植民地と国内はこうも違うということです。私どもは天皇陛下のもと、国内も朝鮮も同じだと思っていました。朝鮮や台湾の人たちも、同じ天皇陛下を頂点に考えていると思っていました。しかし、それは私たちの思い上がりであって、植民地の人たちと私どもの国民意識は全く違っていたということです。

労働組合との出会い

なぜ、私が労働運動に一生懸命になったのか。戦中は労働組合がありませんでした。いや、労働組合は、みんな解散させられたのです。政府は国際情勢をふまえ、統制経済、権力の一元化へ向けて強力な政治力を持つ一国一党の大政翼賛会というものを成立させました。もちろん、その当時、労働組合は非合法でしたから、そんなに多くはありませんでしたが、全て解散させられました。だから、私にとって「労働組合」というのは、聞いたこともない、知らない言葉でした。

私は、シベリア抑留から帰ってきて、昭和23年に職場に復帰しました。東洋紡では、すでに昭和21年に労働組合が結成されていました。軍隊に召集されてから、満州に約1年間とシベリアでの捕虜としての抑留生活が3年少しだけから、4年の間、私は日本の国外にいたので、東洋紡について何の情報もありませんでした。

帰ってきて、まず、驚いたのが、労働組合から私宛てに手紙が来ていることでした。私だけでなく、おそらく復員した人たち全員、特にシベリア帰りの人たちに出していたのでしょう。その手紙の内容は「労働組合の事務所に必ず立ち寄ってから、会社の人事のほうへ行つてください。そこに、浅井という書記長がいるので、その人と一緒に人事へ行って復職の手続きを行つてください」ということでした。私は、「何だろうな」と思っていました。

幸い、富田工場は、工場全部が爆撃に遭いませんでした。戦中にあった食堂の前に労働組合の事務所があって、そこに「東洋紡績労働組合富田支部」という看板がありました。そこで、はじめて「労働組合というものがあるんだな」と分かりました。私は、4年間のブランクがありましたし、また捕虜ボケというか、非常にショックなことも多々ありました。特に、自分の仲間がほとんど戦死し、最後の看取りもしましたので、茫然となっていて、どちらかと言えばうつ病でした。このことは後で詳しくお話しします。

労働組合で驚いたのは、私と親しい当時23歳の菅野さん(後のゼンセン同盟会長代理)が、東洋紡富田支部4,500人の副支部長になっていたことです。富田工場は、東洋紡のなかでも一番大きい工場です。

賃上げの決起集会では、菅野さんは組合員4,500人の前の演壇に座っていました。「私は何で菅野さんがあんなところに座っているんだろう」と本当に驚きました。流通関係の組合は休みも違うため代議員制をとり、全員集まって大会や集会を行うことはあまりないと思いますが、繊維関連の組合の場合は、組合員の年齢もありますが、多くの人は寮や社宅に住んでおり、当時はいっせいに休日を取れますから、メーデーであろうが、支部の大会であろうが、欠席はできません。そのときに欠席したら外れ者です。そういう意味では、工場のほうが徹底しやすいのです。そのときは、工場のそばに野球場がありましたので、そこに組合員4,500人が集まり、私は後ろの方にいました。

議長が「ただいまの書記長の説明に対して、質問のある方」と言うと、女の子たち数十名が手を挙げました。筒袖の着物を着て、三尺の帯を締めて、5、6人で町へ行ったときは、部屋長が「右」と言ったら右に行く、「左」と言ったら左へ行くような、か弱い女性だと思っていたら、この4年間で、4,500人が集まっているなかで手を挙げるのです。みんな小学校6年を卒業した女の子です。私はこの光景をいまでもはっきり覚えています。

その発言のなかで特に覚えているのは、松井さんという人の一言です。「労働組合は、私たちの労働条件向上のために、頑張ってくれています。もしストライキを決議するなら、私どもは絶対に賛成し、要求貫徹のために闘います」。そうしたら、みんなが「わー」と歓声をあ

げたのです。今、その発言内容について考えると、特にどうということはありませんが、私は、「別の国に来たのかな。あれほど弱かったわれわれの仲間というか、後輩が、労働組合が結成されたことによって、みんなそれぞれの意見を発言できるようになっている」と、彼女の発言と労働組合というものに非常に衝撃を受けました。私は、単純ですが、非常に感激しました。

それで、私は、私を知っている寮の人たちもいましたので、組合の青年部長に立候補しました。そして、私は圧倒的な得票で当選しました。当時、東洋紡富田支部の支部長は、小川さんという人でした。また私は、総同盟の青年対策部長もやりました。富士電機や東芝など、戦前は別としてあの当時は総同盟でした。

ただ今振り返ってみると、私に対する会社の監視がとにかく厳しくなされていたということです。ちょうど、昭和25年に、レッドページというものがありました。私は、会社の人事に呼ばされました。その場には、人事部長、人事課長、人事部、工場長がいたと記憶しています。そこで、「佐藤くん、君には仕事も一生懸命やつてもらっているし、組合も熱心にやっておられるけど、あなたの言動は、どうしても会社としてはレッドページという、一つのページをしなきゃならん」と言われました。

私が一番大きなショックを受けたのは、青年対策部長（常勤）のときのことです。私が常勤で発言した内容を、人事部が「佐藤文男の議事録」として持っていたということです。最も不信感を持ったのは、常勤の会議には三役の4人と役員8人の合計12人だけしか出席していなかったのに、何で私の発言が経営側に流れているんだろうかということでした。私は本当に情けなくてしかたがありませんでした。

もう一つ引っかかったことがあります。私は「みんな、民青の人たちを会社も組合も寄つてたかって、排除する気か」とハッキリ言ったことがあります。民青とは民青委員、共産党的青年部です。私は、あの連中に執行部を乗っ取られたりすることについては問題だと思っていたが、あの人たちは、「会社と組合の幹部が、どこぞこの飲み屋で飲んでいた」というような情報は、すぐに入手していました。そういう意味においては、チェック機能としては、少数の民青の人たちがいてもいいのではないかと思っていました。それで、結局私は出勤停止2週間でした。

そして、このことで、私を支持していた青年部の幹部も、出勤停止1週間という罰を受けたことについては、本当に申しわけないと思っています。ですから、私がそのとき、企業別労働組合に対して、非常に不信感を持ったのは事実です。

組合専従としての出発

その後、私は新設の浜松工場に転勤して、支部の役員選挙に書記長として立候補しました。すると、浜松支部の女性組合員たちは、会社が情報を流したのでしょうか、「あの文ちゃんという人は、危険思想を持っている人だから、投票してはいけない」ということで、一度は私の否決でまとまっていたそうです。しかし、富田工場の婦人部の人たちがわざわざ浜松まで来て、「文ちゃんを支持しないとだめよ」と、多くの女性組合員にかけ合ってくれたのでした。そのときの私の対抗馬は、東大卒のキャリア組のTさんでした。投票の結果は、浜松支部約1,500人の組合員の内、1,370票が私という圧勝でした。Tさんに投票したのは、キャリアの人と職員（ナショナル社員）だけで、それ以外は全て私に投票したという状況でした。

あの当時は、1年ごとの役員改選がありましたので、毎年選挙を行い、対抗馬に圧勝しま

した。さすがに、3回目から会社は絶対に私に勝てないと思い、あきらめたようでした。

私が今日あるのは、東洋紡浜松工場で専従書記長を経験したことが始まりだと思っています。それがなければ、近江絹糸の闘争の経験もありませんでした。また、近江絹糸の闘争を通じて、全織同盟幹部の宇佐美忠信さん、田中時雄さん、それから中央教育センターの最初の総主事の矢田彰さんたちと会うことができました。あの人们は既にそれぞれの場のリーダーとなっていました。あの人们的のすばらしさは、近江絹糸争議のときの対応で実感しました。

会社は製品を出荷しないとやっていけません。私どもはその製品の出荷を阻止しようと、全織同盟の加盟組合や全織を応援する労働組合が集まって、ピケを張りました。しかし、出荷阻止排除の仮処分が出されて、機動隊がピケの排除に入りました。そのため、責任者の宇佐美さんが手錠を掛けられる事態になりました。

すばらしかったのは、その時の宇佐美さんの態度です。絶対にびくともしません。胸を張って、連行されていきました。それを見てすばらしいなと思いました。普通なら、手錠を掛けられたら驚くと思いますが、あの宇佐美さんは全然びくともしませんでした。

その後、日本通運のトラックが製品を載せるために20台余りやってきました。すると、そのトラックの車輪の下に、多くの女性組合員が入り込みました。日本通運の運転手たちは「われわれは、同じ労働者として、いくら会社の命令であっても、とてもじゃないが、このトラックに荷を積んではいけない」と言って、空荷のままで帰っていきました。そのとき、私は労働者の力、労働組合の力というものに感動しました。

全織同盟への入局

上部団体への入局のきっかけは、労働組合の運動に参加しようというのが一般的だと思います。私自身、そういう思いもありましたが、近江絹糸の闘争に参加したことにより、それ以上に上部団体のの人たちと、の人たちのもとで働きたいと思いました。

そのとき、私は東洋紡の資格試験に合格し、ナショナル社員になっていました。普通であれば、東洋紡の出身ですから綿紡部会へ行って、東洋紡から全織同盟に行けば、役員になるのも早いのではないかと考えるのが一般的だと思います。当時、全織同盟静岡県支部の常任委員会のメンバーでもあったので、チャンスはあるなと思うでしょう。しかし、私は東洋紡の看板で全織の役員になるよりも、自分自身が労働運動を一生懸命やることで認めてもらおうと思いました。ですから、全織同盟に入局して、綿紡部会ではなく、県支部で仕事をしました。

静岡県支部では、私は非常に恵まれていました。担当する加盟組合も、もともと常任委員会のメンバーの人たちなので、みんな協力してくれました。そういう点では、私は非常に恵まれました。

政権を取った民主党の鳩山首相がしきりに「友愛」を掲げていますが、あの人が誕生したときに、ちょうど全織同盟の機関誌『友愛（現在の Yuai）』ができました。ですから、もともと「友愛」というのは全織同盟のシンボルなのです。さらにさかのぼれば、鈴木文治さんが結成した「友愛会」の理念もあります。

全織同盟の組織化

未組織の人たちを組織化するという運動のなかで、集団組織化を行ったのは浜松が最初で

す。ただ、これはあまり誤解されても困りますが、例えば、全織同盟が織布工場など目標工場の組織化に本気で動きだしたら、「全織同盟に狙われたらたまらん。われわれ経営者がいくら抵抗してもやられてしまう。それならば、話し合いに応じた方がいいな」というようなことが集団組織化の始まりなのです。ただ単に、集団組織化が生まれてきたのではありません。やはり、全織同盟の強烈なオルグ活動で、1人、2人と説得し、理解してもらい、話し合いを重視するというやり方で進めたのです。

今は、組合費のチェックオフというのは当たり前のようになっていますが、会社とけんかして組合ができたときには、絶対に会社は便宜を図ってくれません。

当時の静岡の染色工場の組合では、組合費のチェックオフが行えませんでした。ですから、給料日の休憩時間に、組合の専従者が組合費を集めて回ります。その当時の染色工場の組合員は主婦が多く、例えば、「あそこの店では大根が100円なんだけど、ちょっと離れたところに行くと80円で買えるんだよね。主婦は大変よ。何かあつたら頼みますよ」というような話をよく聞くことがありました。そういう人たちが組合員ですから、組合費を徴収するのは大変です。しかし、本当ならチェックオフではなくて、組合員一人ひとりから組合費を徴収する方が、労働組合にとっても、組合員にとってもいいことだと思います。しかし、時代は変わりました。だから、私の話は全織同盟の先輩がこういう運動をやってきたということだけを分かってもらえばいいのであって、決して「俺がこうやってきたから君たちもやれよ」というようなことは言いません。今のU I ゼンセン同盟も、もちろん話し合いを重視していると思いますが、清水さん（現在の組織拡大局長）や佐久間さん（現在の常任中央執行委員）が昔と同じようなことをやっていると思います。

しかし、何といっても、実績がものを言います。そして、「100万全織」というのは、私たちにとって、特に組織を担当しているものにとって悲願であり、夢でした。だから、当時、新人が入局したときには、「100万全織構想を書いてみな」とよく言ったものです。しかし、そんなことはなかなか画けません。私は、徳田さん（現在の副会長）にも聞きました。多くの人たちに聞かなければ画けません。

徳田さん、二宮さん（現在の東京都支部長）、逢見さん（現在の連合副事務局長）たちが入局したときは、全織同盟の組合員は約50万名でした。当時は綿紡の力がありました。化織にも力がありました。そして、衣料部会や羊毛、麻資材も頑張っていました。そのなかでもとくに組織化が進んだのは、地方部会です。

ここで、知っておいてもらいたいのは、他産別との違いです。電機労連という大きな産別があります。あるいは、自動車や鉄など、それらの産別とゼンセン同盟の違いを分かってもらいたいのです。どういうことか…。

電機労連は当時、中卒の人がたくさんいました。ゼンセン同盟も同様でした。電機労連は、思想的には社会党系ですが、運動としてはゼンセンの運動と非常に近かったのです。その当時、電機労連の組織局長はNさん（後の衆議院議員）でした。

当時、完全な個人加盟方式の大きな産別は、海員組合だけでした。私どもの若いときは「ゼンセン同盟も完全な個人加盟方式の産別にしなければ」と考えたこともありました。しかし、「待てよ」と、考えました。私どもの大先輩や戦前から労働運動を行ってきた人たちのことを振り返ってみました。

敗戦後、アメリカを中心とした占領軍が、日本の憲法を変えました。アメリカの日本通の人が日本を研究し、单一民族である日本の労使関係のあり方をふまえて、企業別労働組合を

認めたのだと思います。

そこで当時、ゼンセン同盟の組織の副部長だった山田さん（故人：初代連合事務局長）が中心になって、海員組合の組織部長の〇さんを1カ月に1回呼んで、産別組合の在り方や強化について勉強会を行いました。そこで気がついたのは、「企業別労働組合の弱点を克服するには統一闘争の強化、中央集権だ」「統一闘争の強化こそ企業別組合の弱点を克服する」ということです。この姿勢が他の産別とゼンセン同盟の違いです。

海員組合の場合、海外に派遣されている人たちは、ヨーロッパやアメリカの労働組合を知っていた人たちが経営者ですから、その人たちが中心になっていたので、違うと言われたらそのとおりです。おそらく、その背景に完全な産業別労働組合を認める下地があったと私は思います。

統一闘争

中央統一闘争は、加盟している企業別労働組合の決定権を委譲して行います。当時は、大手といえども「ゼンセンの言うことを聞きなさい。そのほうが組合員のためだ」と言いました。

企業別労働組合の幹部のなかには、ゼンセン同盟に入局する人もいますが、ほとんどが組合役員を退任したら会社に帰るわけです。私は、企業別労働組合の役員には、「あまり酷なことをやってはいけないよ」と言います。会社に帰るわけですから、会社に対して厳しいことやっていたら、経営者に「あいつは…、今に見てろ」ということにもなりかねません。なかには理解のある経営者もいるとは思いますが…。

だから、その企業別労働組合の弱い部分を補うのは、中央統一闘争や中央集権だと思います。でも、今は難しくなってきました。

単組の交渉

正月3日までの初売りをどうするかという正月営業問題がありました。ゼンセン同盟としては、1日、2日は絶対休みとし、3日を特例日とすることをはじめとする方針を決定していました。

しかし、C労組は、労使交渉でその方針に基づいた内容で合意することができなかったのです。流通部会では、手当を出しなさいという決定になり、ゼンセン同盟の中闘でも同じ内容で決定しました。ゼンセン同盟が物事を決めるときは、多数決です。そして、民主主義の一番大事なことは、少数意見は尊重しますが、多数決で決定したことには従うことです。それが民主主義の基本です。

当時のC労組の委員長、書記長、副委員長の三役と執行部は非常に困りました。そして、「自分たちにはこれ以上交渉能力がないので、ゼンセン同盟にお願いしよう」ということで、私のところに要請がきたのです。「誠に申し訳ありませんが、単組には交渉する能力がありません。また、既に労働協約を締結しています。ですから、ぜひゼンセン同盟の人が団体交渉に入って直接交渉してもらえないでしょうか」ということでした。

C労組は、「スト権も含めて佐藤に委任する」ということでしたので、私は交渉に行きました。委員長は「とにかく、佐藤さん、あなたに任せたよ」と言って、団交の場に向かっていきました。団体交渉の会場では、Aさん、Bさんという経営陣がずらっと座っていました。

そこで、開会のあいさつをする前に、委員長は「ただいまC労働組合において、佐藤文男

氏に、スト権を含めて交渉を委任します」と発言しました。会社も唖然としていましたが、その後、労働組合側は委員長と私、会社側はBさんとSさんの4人で交渉を行い、2日は営業しないことにしました。2日を休業するというのは大変な金額になると思います。あの当時は、まだ余裕があったので認めたのでしょう。今では、そういうことはできないと思います。

全織同盟の伝統

産別組織として、今日のUIゼンセン同盟の具体的な運動は、変わってきていると思います。しかし、どうしても守っていかなければならない伝統があるはずです。

全織同盟の結成のときは、戦前から労働運動をやっていた人たちがいました。この人々は、当時労働組合は非合法なので、刑務所に入ったりしながらも、運動を続けた人たちです。非常に根性のある人たちです。

その人たちが全織同盟を結成するときには、はじめに東洋紡とか日東紡などの大手十大紡を中心に、同じような組織力の組合を集めました。そして、次は新紡、新新紡です。その後それらの会社に関連するところは、強力に組織化活動をしなくても加入しやすくなりました。

いろいろな意見があります。大手の組合の親分衆は、まず大手を中心に組織化して、それから中小をやつたらどうかと言います。これは、一つの理屈です。

しかし、戦前から刑務所に入れられても、あきらめずに頑張って運動を続けてきた私どもの大先輩は、中小を抜きにして産別はあり得るかと強調されました。本来、労働組合は弱い者のためにつくったものだと思います。

そうならば、大手中心ではなくて、中小の人たちにも各種の会議などに入ってもらい、中小の労働組合の立場から、大手では分からぬ問題や課題を発言する場が重要だと思います。

「二重構造」と言われている産業において、中小に力を持たせないといけません。その二重構造を打ち破る気持ちが労働組合になければなりません。

都道府県支部の役割

私は、中小の労働組合運動に非常に力を入れてきました。私が県支部の常任だったときは、中小企業、地方部会に所属している組合のお世話です。団体交渉も出ますし、様々な教育など、面倒を見ることがたいへん重要な仕事でした。

あの当時、ゼンセン同盟の会費の使途は、県支部の仕事の量から言って、多くは地方部会に関連した県支部の活動に費やされていたと言つてもいいと思います。それについて、ゼンセン同盟の綿紡、化織、羊毛でも、あるいは衣料でも、大手の人たちはそれを理解していました。

大手の下請けをしている中小の企業が数多くありました。化織関係は福井県や石川県など、綿関係は静岡県や愛知県、あるいは大阪府でした。それで、ゼンセン大会になると、大手の下請けをしている中小の組合の代議員が、ゼンセン同盟の本部に対してというよりも、大手の組合に向かってガンガン意見を言っていました。

しかし、地方部会の中小組合は、諸事情があるとは思いますが、会費を滞納しているところもありました。一方、大手の組合は、きちっと会費を納めて、UIゼンセン同盟の県支部の活動、常任委員会のメンバーとしての活動に参加しています。特に支部三役の人たちは、自分の単組の仕事よりも県支部の仕事のほうが多いと言ふ人もいます。今日、綿紡が果た

してきた役割を、流通もやらなければ、リーダー組合とは言えません。

電機労連のEさん（現内閣官房長官）の先輩のSさん（後の衆議員議員）から、D電器の研修会に、講師として来てもらえないだろうかと言わされました。本来なら、私などではなく、著名な学者や有名人を講師として呼ぶのが当然だとは思いましたが、是非にということでしたので、私は3日間、D電器の研修会に行ってきました。D電器の当時の委員長はYさんでした。

こうなったのは、実は電機労連のSさんが、Y委員長に私を会わせ、ゼンセン同盟から産別労組のあり方などを話してもらおうという考えがあつてのことでした。Eさんを中心とした電機労連の本部の役員は、電機労連をゼンセン同盟のような産別にしたいという思いがあったのでしょう。SさんがYさんにその話をすると、「合理化の対応の問題なんです。ゼンセン同盟では、全部ゼンセン同盟の了解がないと、合理化はできないらしい。それはそれなりに立派だけれども、D電器のことを何も知らない人に、この合理化を認めるとか、認めないとかなぜ言わなければならないんだ。何でわれわれが、産別の電機労連にそんなことの了解を得なければならないんだ」とY委員長さんは言っていました。ゼンセン同盟の批判です。ハッキリ言って、これはスタンスが違います。これが電機労連でした。

そのころ、自動車部品の企業もありましたが、その多くが正直なところゼンセン同盟に加盟したかったです。今はどうか知りません。以前、岐阜県支部長を務めた柴田さんも、本当だったら電機労連に入るべき企業の出身の人でした。結局、中小の労働組合からの相談にすぐに乗ってくれるのはゼンセンなんです。

もう一つ、こんな例があります。京都には、総評や同盟系などいろいろな組織が同じ会館に同居していた時期がありました。電機の部品をつくっている企業の人たちが、県評に相談に行くと、昼休みに麻雀をやっていたそうです。そこで、ゼンセン同盟の京都府支部に相談に行くと、女性がいて「どういう御用ですか。どうぞ、どうぞ」と言って、お茶を出して相談に乗ってくれたというのです。そして、「支部長が東京に行っているので連絡してみます。常任委員会の議長のところにも電話します」と言って対応してくれたというのです。当時の議長は、ユニチカだったと思います。その当時は、ゼンセン同盟が電機関係の企業の組織化をまだやっていませんでしたが、いろいろと相談に乗っていました。それが非常に大事なことなんです。

社長の心を変えたゼンセン職員の対応

名古屋にあるタキヒヨーという卸問屋の組織化では、愛知県支部も、私たちオルグも強力な活動を進めていましたが、なかなか結果が出ませんでした。

当時、愛知県の長者町のあたりは、民社党の委員長の春日一幸さんの選挙地盤でした。ゼンセン同盟がだんだん強行に組織化を進めてくるので、社長が春日一幸さんを通じて、直接滝田会長に会って話をしようとしました。よくある話ですが、「ゼンセンのことはよく分かっている。よそに入るよりはゼンセン同盟にお世話になります」と言って、とりあえず、今の状況を開しようと考えていたのでした。

そして、タキヒヨーの社長は、春日一幸さんの紹介で滝田会長に会いにきました。当然、組合づくりの先送りをもくろんできたわけです。あの当時は、4階建てでもエレベーターのない昔のゼンセン会館でした。社長は会館の受付で来意を告げると、担当の一瀬幸子さん（故人）から非常に丁寧に応対されたので、「何て軽いいい事務所なんだろう。労働組合だから、

行儀も悪いんだろうと思っていたのに」と驚いたそうです。

社長は、組織化を断りに来たのでしたが、「こんな素晴らしい労働組合の上部団体なら、お世話になろう」と思ったそうです。その後、まもなく、タキヒヨーはゼンセン同盟に加盟しました。愛知県支部も私たちオルグも一生懸命、何年もかかって組織化に取り組んでいました。私たちオルグが出張すれば、相当な旅費がかかります。県支部だって、他の仕事をやらないくてはいけません。大変な時間と労力をかけて取り組んでも実現できなかった組織化が、ゼンセン本部の職員がゼンセンとして自然な対応をしたことで、成功につながったと言えると思います。こういうゼンセン同盟の職員としての行儀の良さや応対については、伝統として受け継いでほしいと思います。

私は、他の産別の状況を知るために、産別の代表がたくさん集まっている連合の中央アドバイザーに手を挙げて参加しました。私はいつも早めに出勤して連合の会館に入りました。知らない人が待っていたら、その人はお客様です。その対応がきっちりできていませんでした。

労働組合といえども、ハッキリ言って「経営」です。最近、あまり言わなくなりましたが、「労働組合も経営」です。電話の受け答えや職員のマナーをはじめ、全てが経営感覚でなければなりません。

労政事務所長の勘違い

静岡県支部時代のことです。私の県支部における重要な仕事の柱は、組織化です。私は寝ても覚めてもという言葉がありますが、頭の中ではたえず組合づくりのことばかり考えていました。結果として1年目は15組合、2年目は23組合の組合結成に成功しました。そんなときのことです。私が静岡県支部に行くつもりで、浜松駅で偶然、浜松の労政事務所長と会いました。「佐藤さんも行かれんですか」と聞かれたので、これは何かあるなと思い、労政事務所長に付いていくと、磐田駅で降りました。それとなく、事情を聞くと、磐田市内の主要な工場の幹部（経営者）たちが、現在の労働情勢を聞きたいということで、労政事務所長を呼んだようでした。

会場に集まった人たちのなかには、おかしいなという顔をした人もいました。労政事務所長が県の労政事情を話し、「詳しいことや具体的な内容については、ここにゼンセン同盟の佐藤さんがおみえになっていますので…」と言われました。会場は騒然となりました。しかし、仕方がないので、私はそこで話をしました。

その労政事務所長は当時のゼンセン同盟静岡県支部の田代支部長に、「あの時はまいったな。私は訓戒を受け、ボーナスを2回カットされた。うちにも佐藤さんのような職員が欲しい」と後で言っていたそうです。それがきっかけで天竜社（別珍・コールテン）の組織化の糸口をつかむことができました。

組織化のための家庭訪問

静岡の今枝染工の組織化を行ったときの話です。今枝染工は、今でも、染色技術の向上、高品質を徹底追求し、常に安定した堅実経営を行っている染色工場です。当時、静岡県内の日本形染や大和染工は、既に労働組合を結成し、全総同盟に加盟していました。しかし、その地域でもっとも利益を上げている今枝染工は、私どもの呼びかけにはなかなか応じませんでした。

そこで、私はその地域の様々な情報を収集しました。浜松工業高校当時、サッカーチームのキャプテンだった人が今枝染工のサッカーチーム結成の中心的な人物であることが分かりました。私は、その人を口説き落とせたら、組織化の糸口がつかめるのではないかと考えました。

工場で本人に会うわけにはいかないので、休日に直接自宅を訪ね、玄関先で話をしました。私は「この地域の同業の日本形染や大和染工の組合の人から、今枝染工に組合をつくって一緒にやってほしいという要請があったのでお伺いしました」と言いました。しかし、当事者の本人からは「分からないわけではないですが、私は専務にものすごくお世話になっています。専務のポケットマネーでサッカーチームが成り立っているようなものなんです。他の人がやるのならば私も付いていきたいと思いますが、私が中心になって労働組合をつくるわけにはいきません」という言葉が返ってきました。それから、数分間話をしているとき、玄関に視線を移すと、キティーちゃんの絵が描いてある子供のスニーカーが二足あり、その家に子供がいることに気づいたのです。私は、ここで一旦引きあげました。その後、自転車でその家の近隣をうろうろして、奥さんが家から出てくるのを待ちました。「あそこの家は、奥さんが強いぞ」という情報を仕入れていたからです。どのくらい待ったかは記憶にありませんが、奥さんが二人の子供を連れて家から出てきました。私は、偶然会ったように装い、「奥さん、買い物ですか」と声をかけました。そして、二人の子供にグリコのキャラメルを一つずつあげようとした。奥さんは「ダメよ」と言いましたが、子供はすぐに受け取りました。私は「いいじゃないですか、奥さん。暇だったんで、そこのパチンコ屋でとってきたものなんですから」と言いました。

私は、約1カ月程経ってから、また自宅を訪ねました。今回も玄関先での話になると思っていましたが、奥さんが「ねえ、お父さん。玄関で立ち話もなんですから、中に入つてもらつたらどう」と声をかけてくれ、部屋の中で話すことになりました。

私は、「今枝染工さんは、『ボーナスは日本形染よりも高い』『基本給もうちが高い』とか言っているようですが、本当のところはどうなのか。例えばボーナス。日本形染等は手当を含めて2カ月だったとしたら、今枝染工さんは基本給の何カ月という計算ですから3カ月程度出さないと同等以上にならない。あなたの主人が中心にならないと、今枝染工の労働組合はできないんです。従業員350人、みんなが支持する労働組合を結成してくれませんか」と、労働組合の必要性を奥さんの前で話しました。

そうすると、「お父さん、みんなのためなら、今枝染工の専務よりも従業員の方が大事なんだよ。会社も大事だけれど、みんなや全織同盟の方が、それだけお父さんを頼っているんだから。あんたも、男でしょ」と、奥さんが関わってくれたおかげで、労働組合ができたということもありました。

一人ひとりが役割を果たすことが組織力に

私たちの時代は、組織化がやりやすかった面があります。今は難しいと思います。また、今、それぞれの人が役割を果たすことが大切だと思います。私どもを含め、U I ゼンセン同盟の同盟職員みんなが誇り持つことと紳士的な対応を行うことが求められています。それを実際に体験したのは、G屋（K労組）の組織化のときです。

当時のG屋では、G会長の姉のSさんが、人事の実権を握っていました。G屋というのは、戦前からの老舗の呉服屋です。戦中は「衣料切符制度」がありましたので、G屋は私どもとつながりがありました。

このG屋のSさんと私との組織化をめぐってのやりとりを紹介します。

もう数十年前のことですが、経団連が著名な評論家や大学教授などを講師に、団体や企業のトップを集めて、箱根で勉強会を開きました。滝田会長も講師陣の1人として呼ばれていました。これに参加していたKさんは、後で私と会ったとき、こう感想を言うのです。「滝田さんは、さすが全織同盟50万の会長だけあって、他の講師の方より話す内容も一段と光っていて、紳士的で立派ですね。ところが、それに比べて佐藤さんははじめ、オルグの人たちは行儀が悪いですね。やれ組合員を動員して全国の店をオルグするとか、宣伝カーで組合づくりを呼びかけるとか、乱暴なことを平気で言う」。

私は、「そうです。組合結成を邪魔するようであれば、組合員をたくさん動員して全ての店舗の説得工作もします。それが私の仕事です。きれいごとばかり言っていては組織化は前進しません。紳士的にやっても組合はできませんよ。厳しいことも言わないと組合づくりに踏み切ってくれるのが経営者です」。さらに、「ではSさんのところはどうですか。バイヤーが問屋などと仕入れの交渉をするとき、どんな話をしているか、ご存知ですか。紳士的に相手の話を聞くよりも、いかに安く仕入れるか、時には激しい言葉を発し、取り引きに応じないこともありますよ。もしGさんたちがバイヤーと同じようなことをやっていたら、今日のKはありませんよ。ゼンセン同盟も同様です。滝田会長や宇佐美会長が私たちと同じことをやっていたら、今日のゼンセン同盟はありませんよ。われわれのような人間もいないとダメなんです。本音と建前は違うんです。Sさん、それをあなたが一番ご存知なのではないですか」という話をしました。

私が言いたいのは、歴史や引き継がなければならぬことを大切にしてほしい、それとドロまみれになってそれぞれの役割を全うしてほしいということです。

清水さんや佐久間さん、町田さん（組織強化・教育局長）たちも私の後継者として同じようなことをやっているのではないですか。今、私が心配しているのは、そういう人も必要ですが、会長の落合さんや書記長の島田さん、橋本さん（副書記長）に、そういうことをさせてはならないということです。絶対にそういうことをさせてはいけません。

選挙は組織力の通信簿

選挙についても同じことです。今では考えられませんが、選挙法すれすれのことを三役会議で議論するわけです。当時は、破廉恥なことをやるわけではないし、選挙違反ぐらいという思いで対策を考えていました。ある選挙（瓜生参議院議員選挙）では、三重県で支部長をはじめ常任委員会のメンバーや婦人部長を含め、関わった多くの組合員が逮捕されたことがあります。残ったのは書記局の常任1名でした。今なら、その人たちは二度と選挙活動はやらなくなってしまうと思いますが、次の選挙もみんながしっかり取り組みました。これが、ゼンセンの誇りだと思います。私はありがたいことだと思います。

ゼンセンの票は、九州・四国の離島から北海道の山の中まで、また組合員だけでなくその家族のみなさんも含めいろいろな人たちから集まります。その当時、日清紡の組合員の実家をお訪ねしたときに、組合員と離れて暮らす母親にこんなことを言われました。「ゼンセンのお方ですか。うちの娘が大変お世話になっています。うちの娘から話は聞いています。今度、藤井という方が選挙に出られるそうですね。いつもお世話になっていますので、ご心配なく。うちのじいちゃんとばあちゃんをはじめ、家族で支援させていただきます。ただ、うちの場合、長男は国鉄に勤めていますので、これはちょっと勘弁してくださいね。しかし、

じいちゃん、ばあちゃんと私ども夫婦は必ず投票させてもらいます。うちの娘が世話になっていますから」。おそらく、ゼンセンの支部や日清紡の支部からの手紙が届いていたことと思います。そして、その手紙を受け取った母親は、娘から日々の組合との関わりを聞いていたこともあり、まじめに誠意をもって対応してくれたのです。ゼンセンの票とは、そういう票なんです。当時は、ゼンセン 50 万名の組合員がいて、組織票は 50 万票となるわけですが、未成年者の組合員も多く、特に紡績は選挙権がある組合員は 20% 程度でした。しかし、組合票、組織票は絶対に出しました。

だから、今でいえば、私どもはただ単に候補者の柳沢さんを当選させるだけではありません。組織で決めたみんなの大義の実践なのです。

女優の八千草薫さんは、一番売れているときに映画監督の谷口千吉の奥さんになりました。その谷口千吉さんが、奥さんの八千草薫さんを連れて、ゼンセンの中央委員会に来たことがありました。そのとき、加盟組合の大手の親分衆からこんな話がありました。「ゼンセン同盟が八千草薫の出馬を決めれば、組織の票が 30 万票、八千草薫がだいたい 30 万票を取る。それで 60 万票。そうすると、当選は間違いない」。当時の全国区は、今よりも多く得票しないと当選できませんでした。

しかし、私はこの意見に反対でした。なぜか。選挙こそ、組合の通信簿なのです。ゼンセン同盟という組織で決めたことは、私どもが守るのは当たり前です。当然、決めるまでには、本部や部会や支部、そして加盟組合の各種会議で議論を行うための時間をかけます。もし、反対ならば、その各種会議の場で「われわれは反対です」「しんどいです」と言えばいいんです。みんなで話し合って、みんなで決めたことを守るのがゼンセンの伝統です。決めたら守るのです。そうでなければ、決める前に、堂々と反対と言えばいいのです。

今のように、100 万名を超える組合員がいるのに 20 万票も取れないようだったら、決める前に「反対です」と言えばいいのです。自分たちの組合が決定したことをいかに守るか、守られているか、その通信簿が選挙の得票結果です。それで、私たちの代表や民主党の候補者を政治に送り込むということなのです。

私がこう言うと、他の人に嫌われることがありますが、あえて言いたいと思います。組合幹部のなかには、奥さんを説得できない人がいます。そうであれば、組合幹部はいません。私が知っている限りでは、ゼンセンの幹部の中にもいました。自分の奥さんを説得できないのに、組合員に「1 人 5 票取れ」などと言っています。こんな人は、本当に偽物です。

昭和 31 年 7 月、全織同盟は、参議院選挙全国区で「上条愛一」という人を、94 票差で落選させてしまったことがあります。その開票日の翌日の朝、大和染工の委員長、日本形染の委員長、東綿紡の委員長ほか十数名が頭を丸坊主にして全織同盟の事務所にやってきました。あの当時の浜松では、組合員 3,000 人ぐらいで、得票は 2,100 票でした。それでも、責任を取って丸坊主になったのでした。選挙の取り組みについては、もう少し考えなければいけないと思います。

私は、固定票を 100 票持っています。私の妻は、30 票持っています。三多摩で 100 票ありますから、今年も出します。

交友一言録から

組織化の実績について、みなさんからいろんなところで評価をいただいていることについては、嬉しく思います。そこで、SSUA が 1993 年に発行した「SSUA を育んだアドバイザ

一佐藤文男さん「交友一言録」に寄せていただいたものを、一部紹介させていただきます。はじめは、ゼンセン同盟の愛媛県支部で支部長を務めた門岡さんが書いたものです。

今治地方では、「組合結成、ストライキ」という組織化が常識であった昭和37年当時、「集団組織化」という新しい方式で、タオルと縫製業界へのオルグを始めたのが佐藤さんでした。私を含めて、今治地織のメンバーは、「そんなことは不可能では」と、疑心暗鬼の気持ちで見ていました。しかし、佐藤さんは今治に常駐し、香川県の手袋も含めて精力的に連日のオルグを行い、38年2月に香川県手袋労連、6月に今治タオル労連、39年1月に愛媛県輸出縫製労組を見事結成しました。これには、愛媛県内でも最精銳組織といわれていた今治地織のつわものたちも、佐藤さんの先見性とオルグにかける情熱と行動力にただ脱帽するばかりでした。

約1年8ヶ月の今治常駐の間、家に帰って泊ったのは2週間程度でした。最長で6ヶ月間帰らなかったこともあります。その時は、家に帰ると1歳6ヶ月の長女が私の顔をしみじみと見ながら、「おじさん」と言ったものです。ですから、ある面では子供がかわいそうです。今なら、飛行機で行けば1時間強の距離ですから、そんなことはないと思います。ただ、それだけ組合結成の仕事をしているときには、充実感がありました。とにかく、「オルグが柱」と言いますが、今は無理してそんなことをする必要はありません。

今治地方の組織化ですが、あそこは私どもの先輩の頼木さんが支部長でした。当時は、門岡さんも入局したばかりでしたので、支部長に「あれをやれ、これをやれ」と言われていました。しばらく私は厄介者、邪魔者扱いで行くところがなかったので、一人でタオル織物協同組合に行きました。そうすると、対応した職員が、「佐藤さん、あなたは本当に熱心にやられている。情報をあげましょう」と言って、組合の経験のある社長の工場を紹介してくれました。これを糸口に今治の組合結成が進み、全体の組織化の成功にこぎつけました。

もうひとつ、紹介します。ゼンセン同盟流通部会初代書記長の竹山京次さんが書いたものです。

「蒔かぬ種は生えぬ」。佐藤さんの浜松時代、このひっそりと佐藤さんの蒔いた一粒の異色の種はG屋が44年Kへと受け継がれ、いまや200を超す組合数26万組織の大樹へと成長した。育ての親は何人いても生みの親はただ一人。ゼンセン流通の萌芽を思うとき「浜松地区事務所長・佐藤文男」の名前は忘れられない。

当時の全織同盟、特に綿紡は異業種のところは入れませんでした。全織同盟は純粋な織維でいきたいと思っていたからです。だから、D；も早くからゼンセンに入るつもりでしたが、受け入れ態勢がませんでした。

私は、国際織維（国際織維被服皮革労組同盟）の関係でアメリカやイギリスなどの国際会議に出席させていただきました。イギリスはもともと織維産業が盛んで、マンチェスターは織維の主産地です。まず、後進国というか、発展途上国がはじめて工業化するのは、織維産業です。私どもが現役のときの織維産業は、韓国、その後は中国へと広がっていきました。そうしたなかで、私どもの加盟組合のグンゼが、韓国の光州韓日織維の組織化に取り組みました。そのことは、国際的にも注目され、私がウィーンの国際会議に出席した折に、このこ

とを報告しましたが、高い評価を受けました。

理屈なしに戦争反対

私は、1回刑務所に入りました。犯罪や戦争犯罪ではありません。

私の妻は「お父さん、こういう話をしなよ。組合の話は、みんなすると思うんだけども、戦争の経験者も死んでだんだんいなくなる。あんたは、組合に呼ばれると、喜んで行くけども、組合の話をする人は大勢おるよ。お父さんのように、こういう経験をした人はいないんだから。あんたは、こういう話をする義務があるよ」と言います。

昭和20年8月、私はソ連と満州の国境にいました。その当時、日本とソ連は日ソ中立条約を結んで、ソ連は攻めてこないと思っていたから、満州の兵隊は、本当に弱い兵隊でした。強い兵隊は、みんな南方と本土に集められたわけです。そして、ドイツのベルリンが陥落した途端に、イギリスのチャーチル、アメリカのルーズベルト、中国の蒋介石が、5月に日本の占領政策について話し合っていました。一方の日本は、まだ、近衛さんがソ連を通じて和解工作を行っていました。そんなバカなという話ですが…。

私たちは、国境に一番近いところにいました。ソ連軍は、列車に戦車を載せて運搬し、国境の川のすぐそばに配置していました。私たちには、その光景がよく見えていました。その日、8月8日は、いつもと違い、彼らは晩になるとウォツカを飲んで騒いでいました。それで、怪しいなと思っていたら、前触れもなく、8月9日の午前2時にソ連軍が国境を越えて入ってきたのです。

こちらは軽装備で、相手は大きな戦車です。これは負けるに決まっています。一番悲惨なのは、戦車にひかれたときです。潰されてせんべいになり、目と鼻と口から血が噴水のようになふれ出るのです。本当に悲惨でした。

私たち生き残りは戦争が終わってからも、戦っていました。捕虜になったときは、死刑囚と一緒にでした。

その当時、日本は私がいた中国東北部の戦地に關東軍60万の兵隊を配置していましたが、その60万人のうち、戦死者を除く数多くの兵士がシベリアに抑留されました。抑留中のうち6万人が酷寒と栄養失調で亡くなっています。兵隊は20歳から40歳までの人達ですから、その年代の約6万人が死んだということは大変なことだと思います。

裁判にかけられ、懲役7年半の判決。シベリア抑留となり、抑留生活は第二シベリア鉄道のタイセットというところでした。

そこは、人間の住まないところです。そこでは、一冬で半分くらいが死にました。しかし、人間というのは、すごいもので一冬を過ごすと、死亡者も少なくなっていました。零下40度以下の場合は、日本の労働基準法ではありませんが、働いたらいいけません。一番寒いときは、零下68度です。そういうときは、オシッコをすると、すぐに凍ってしまいます。大体、人間が住むところではないんです。

その後、私が山形に戻った経緯をお話しします。戦場で捕虜になってから、当初はソ連がジュネーブ条約を守らず、手紙を出すこともできませんでした。ようやく3年目から手紙が出せるようになり、戦地での情報を留守家族に伝えることができました。

戦地で友人になった高橋和夫君は、仙台の今で言う雑貨屋を営んでいる家で、おじいさんとおばあさんに育てられた人でした。ソ連軍との戦いで、私は両足に銃弾を受けましたが、

彼は腹を撃たれて小腸が飛び出していました。そのとき、彼は、虫の息で「佐藤、早く楽にしてくれ、楽にしてくれ」と言いました。私は仕方なく、銃で楽にしてやりました。負け戦のときに、苦労を共にしてきた戦友にしてやれることがそれでした。ですから、私は、毎年メーデーが終わってからと、8月15日の年2回、靖国神社へ行きます。それは、彼と私の約束だからです。高橋君に「とにかく、おまえが生きとったら、靖国へ会いに来てくれ」と言われ、私は「だったら、おい、高橋、俺が死んでおまえが生きとったら、靖国に来てくれよ」と言ったのです。このように、洗脳されていました。

だから、私どもはソ連軍と戦っても、戦車に銃弾を浴びせることができました。かつてノモンハン事件という戦争があって、その当時は成功したかもしれません、あの大型の戦車のキャタピラーに手榴弾を3、4発ぐらい浴びせてもびくともしません。みんな、せんべいになるだけです。そういう状況のなかで、彼を殺してしまったのです。

私と山形の家との手紙のやり取りのなかで、高橋さんのおじいさんとおばあさんが家に来て、「文男くんから連絡がないだろうか」と聞いていったと書いてありました。みんな連絡をしていたのです。

そして、やっと戦地から帰ってきました。すると、私の両親から「おい、和夫さんのところへ行ってやれよ。雑貨屋をやっているおじいさんとおばあさんから何度も連絡があり、情報を知りたがっている。仙台まで行ってやれ」と、毎日のように言われたものです。

しかし、私が高橋くんのところに行って「苦しがっているので、最期に私があなたのお孫さんを銃で撃ちました」と言ったら、おじいさんとおばあさんはどういう反応をするだろうかと考えました。そして、「もしかすると、高橋くんはあのとき、万が一助かったかもしれない」と思い、私は東洋紡に復職し、組合に入るまで夢遊病者のようになっていました。今でも時々、「高橋くんは、あのとき、もしかしたら生きとったかも」と思うことがあります。だから、私は理屈なしに戦争は反対です。

なぜ、靖国に行くか、それは彼との約束だからです。ただ、戦犯と合祀されていることについては問題だと思いますが、彼との約束ですから、これからも靖国へは行きます。

労働者の幸せ運動

私は、今年もメーデーに参加します。メーデーはずっと参加しています。

そのメーデーもここ数年、以前と比べるとかなり様変わりしてきました。今は、焼きそばを売ったり、何を売ったりなど、いろいろとやっています。私どもが浜松でやっていたときは、メーデーにはみんなで参加しようということでやっていました。しかし、どうしても参加できない未組織労働者がいました。そうした人たちには、「よし、来年はメーデーに参加させてやるよ」という意気込みでメーデーに参加したものでした。

メーデーを4月29日にやるのも結構です。ただ、5月1日というのはどういう日か、メーデーの司会者や議長から語られたことがありますか。1886年5月1日に、シカゴの縫製工場の3人が中心になって、1日8時間労働の実現のための大衆行動を行ったのがメーデーの始まりなのです。しかし、大衆行動をやると、爆弾を投げるとか、過激なことをやる人がいます。そして、あのときは電気椅子かどうかは分かりませんが、彼らは刑場の露となつたのです。それが、シカゴの縫製工場の人たちです。辞書を見ると、「アメリカの労働者が」とは書いてありますが、シカゴの縫製工場の人たちがやつたということは書いてありません。

5月1日に、私どもの大先輩たちが刑場の露と消えました。それがきっかけで、世界の労

働者が 8 時間労働になつていったのです。かつて繊維会社は、戦前は 12 時間労働でした。その後、8 時間労働になりましたが…。

だから、私どもは、労働者の幸せのためにやつてゐるのだと、もう少し原点を考えてほしいと思います。「労働者の幸せ運動」だと。この前も SSUA の総会で片岡会長がそれを言ってくれていましたから、私もホッとしました。私どもの思いを継承してくれているなど、嬉しく思ひました。やはり、私どもがやつてゐるのは「幸せ運動」です。弱い者の味方です。

誇りを持つ運動家に

かつて、私はゼンセン同盟本部に 30 年いましたが、辞めた人はいません。変な理由で退職した人はいません。確かに、なかには結婚して辞めた人もいます。また、後継ぎがいないという理由で辞めた人もいます。自らスカウトされて辞めて行った人もいましたが、これは自分の意思なので別として、ゼンセンが嫌になつて辞めたなどという人はいませんでした。

私は、ゼンセン同盟の職員になって、地方に行っても大変な誇りを持っていました。「俺はゼンセン同盟のオルグだ」と。その誇りを持っていてもらいたいのです。ゼンセン同盟が雇用労働者を 100% 組織化したそのときは別ですが、未組織労働者がいて組織拡大が必要な限り、失業もありません。

滝田会長のときに、全纖（ゼンセン）新聞の発行を 1 週間に 1 回から、2 日に 1 回にしようという取り組みを検討したことがあります。ゼンセン本部から直接組合員一人ひとりの手元に届くようゼンセン新聞の発行回数を増やして、組合員にゼンセン同盟を身近に感じてもらい、さらに組織力を高めたいという想ひでした。それで、私は、当時の北九州支部へ行って、その地域の組合専従者 75 名に集まつてもらいました。そして、「ゼンセン新聞を隅から隅までいつも見ていますか」と聞きました。また、「正直に言ってください。というのは、滝田会長は、ゼンセン新聞を 2 日に 1 回発行にしたいと考えています。それは、組合員の皆さんからいただいている現行の組合費を使ってやりたいと思っています。当然、2 日に 1 回の発行となると、ゼンセンの活動予算も大変です」と付け加えました。

そうしたら、完全に読んでいる人はいませんでした。しかし、大体は読んでいるという人が専従者 75 名中 50 名ほどいました。これが専従者の実態です。今はどうでしょう。

だから、UI ゼンセン同盟の UI でも、大切なのは「友愛」ということです。

老人のたわごととは思いますが、私はゼンセン同盟が本当に好きです。私はゼンセン運動に全てを捧げたことに全く悔いはありません。全纖・ゼンセン同盟、ゼンセン運動に感謝の気持ちいっぱい生涯を終わらうと思いますが…。ゼンセン同盟、バンザイ！

～完～

さとう ふみお
佐藤 文男 氏のプロフィール

- 1925年7月8日 山形県に生まれる
1941年 東洋紡績富田工場入社
1950年 東洋紡績浜松工場転勤・同労組支部書記長
1954年 全織同盟静岡県支部常任・地域織維労連書記長
1961年 全織同盟本部組織部中央オルグ
1965年 中央執行委員・中対部長（現・局長）
1978年 副書記長兼組織行動部門長
1982年 副書記長退任